僕の一夜、小さく終わる。

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の一夜、小さく終わる。

【Ｎコード】
Ｎ０８３２Ｘ

【作者名】
まなつか

【あらすじ】
この町ではバカが多い。僕はそう、冷静に判断を下している。
毎晩毎晩同級生とはいえないくらい幼く、バカな連中等がつるんで暴走族とやらで走り回っている。そのたびに警察に通報しているが全く効果はない。そういうところだけ賢いのだろうか。
そんなことはいい。僕がここに記しておきたいのはこの間その人間のクズ――本当、国民から外してほしい。あんなやつらに平等権だの、人権だのあったこっちゃない――らがやっていたことだ。僕がすることは本当に小さいことなのかもしれない。アクセス数が一

桁のブログに書いたところで何も変わりはしないかもしれない。だけど、これを読んだ人が少しでも何か考えてくれればいいと思う。

――片山のブログより転載。

一話　始まりの、夜。

この町ではバカが多い。僕はそう、冷静に判断を下している。
毎晩毎晩同級生とはいえないくらい幼く、バカな連中等がつるんで暴走族とやらで走り回っている。そのたびに警察に通報しているが全く効果はない。そういうところだけ賢いのだろうか。
そんなことはいい。僕がここに記しておきたいのはこの間その人間のクズ――本当、国民から外してほしい。あんなやつらに平等権だの、人権だのあったこっちゃない――らがやっていたことだ。僕がすることは本当に小さいことなのかもしれない。アクセス数が一桁のブログに書いたところで何も変わりはしないかもしれない。だけど、これを読んだ人が少しでも何か考えてくれればいいと思う。

僕はクラッカーだ。
年齢は15歳。数学と情報処理に優れているが、どこかいつも周りと違うと言われてしまう。まぁ、周りがクズばっかりだとそうなるか。
「……またやってるよ。――あ、そろそろハードディスクがいっぱいになるな」
苦手な理科の勉強をしながら机についている6台ものモニターで奴らの行動を監視している。この町のたまり場に監視カメラをこっそり設置しては犯罪を摘発するのが僕の趣味となっていた。警察に証拠を提出すると怪しげな表情で疑ってくるが、まだなにも言われていない。
「なに……やってるんだ……？」
映し出された映像の一つに見覚えのある顔があった。
急いでペンを放り出し、キーボードにコマンドを打ち込む。そし

て拡大表示をした。
「な、なぎさ！」
僕は息をすることを忘れ、心臓を動かすことも忘れた。両手がかたかたとふるえる。自然と涙があふれ出てくる。
モニターに映し出された彼女は周りからクズ共に何か暴力をされていた。
「……嘘」
僕は我に返り、さらにコマンドを打ち込む。場所を確定。ここからすぐだ。僕は非常用のものを持ち、すぐに家を出た。机の上には万が一に備えてメモを残しておいた。

二話　クズ共を、通報せよ。（前書き）

この物語はフィクションです。

二話　クズ共を、通報せよ。

僕はそっと陰から様子を見る。
「やめて！　お願い！　お願いします！　何でもしますからぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
耳を塞ぎたくなるようななぎさの悲鳴が聞こえてくる。なぎさは僕がずっと好きなクラスメイトだ。僕は落ち着いてケータイで警察に連絡を入れる。
「はい、警察署です」
「もし、も、もしもし……」
「はい」
「い、いま、ここで暴力を受けている人がいるんですが。男の人たちじゅう……なな名ほどで」
「わかりました。場所はどこですか？」
「はい、えーと……」
そのとき、電話を当てていた左側からすごい衝撃とともに僕は横に吹っ飛んだ。携帯は木っ端微塵となり、飛んでいく。――やばい。
「ようよぅよぅ！　かーたーやーまーくーん！　こんな時間に君みたいな優等生がなぁーにやってんすかぁ？　あ、もしかして俺らの団に入れてほしいとかぁ？」
彼らは日本語をうまくしゃべれないらしい。一回病院行ってこい。僕がいいところを教えてあげる。
「なぎさをはなせ」
「あぁん？」
金髪に髪を染めた彼はほかの仲間等に合図をして僕の周りを取り囲んだ。
「か、片山君！　逃げて！」

なぎさの悲鳴が聞こえる。逃げれるもんなら逃げてるさ。
「どういうことだよ！　おらぁ！？　ケーサツに電話してたんだろぉ？」
「はは、あははは！」
「何がおかしいんだっ！」
ッッ！　僕は顔を蹴られた。だがしかし、僕はマゾ体質な為に効果がないというか逆に興奮してしまって困る。
遠くで警察のサイレンが鳴る。やっぱり最初から目星をつけていたのだろう。
「やべ」
誰かが叫ぶ。
――その一瞬の隙をついて僕はリュックサックから筒型のものを取り出した。
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
ダダダダダダダ　という音とともに銃口から釘が飛び出す。もちろん、脅しだ。自作の銃はどこへ飛んでいくかわからないために見当違いな場所をわざと撃つ。
「おい！　やめろぉ！　この女がどうなってもいいのかよぉ！？」
「っ」
僕は息をのんだ。警察のサイレンは遠くへ行ってしまっている。
――まずい。
「さぁーて、おい、おめー、片山を拘束しろ――あん？　縄でもなんでもいい」
ボスらしき金髪クズは部下らしき銅髪（本当に銅色なのだ。茶髪でもない）クズらに指示をだし、僕に近寄ってくる。
「くっ……」
一触即発の空気。僕はそっと引き金を引く。――が、
「……はっはっは！　残念だったな、タマギレだってよぉー！　ギャハハハハ！」
金髪クズが笑うと銅髪クズも笑う。ひどく滑稽に見える。もう僕

は為すすべはない。
僕は奴らに縛られた。そして目の前にはなぎさがいる。
「やめろ……やめてくれ……なぎさだけは……」
「バカやろう、お前殺してもつまんねえからよぉ、ぉお、こいつ、こ、ここ殺してやるんだぉお！」
薬物にでも手を出しているのかろれつがまわらない金髪クズ。
だけど僕はなぎさのことで頭がいっぱいだった。彼女だけは――助けたい。
ここらに民家は全くない。
「手始めによぉー」

三話　されたこと、されたこと。

ここから先はあまり書きたくない。
まずなぎさは僕の目の前でクズらによって性的暴力をされた。

泣き叫んで助けを懇願するなぎさ。
それをどうすることもできずただただ見つめることしかできない僕。
あれだけ自信があった。それなのに今は無力だったことがものすごい悲しかった、悔しかった。

「助けて、助けて片山君！」

彼女の叫びが痛いほどに僕の頭の芯まで響く。
やめてくれ。

「やめてくれよ」

その言葉は誰にも届かなかった。

「痛い！　いたいいたいいたいいたぁあああぎゃあああああああ」

叫びがだんだんよくわからない言葉になっていく。
もういやだ。

「あ……あぁ……」
暗闇の中、その小さな声が僕の耳に届いた。
「なぎさ……！」
無我夢中でなぎさの名を呼ぶ。
返ってくるのはクズ共の笑い声。

なぎさは死んだ。

僕は気を失った。――おそらく、強いストレスからだろう。
今、思い出しても、つらい。
涙が止まらない。

四話　クズ共、逃げる。

朝になった。
警察が来ていた。
僕は縄を解かれた。
そのままパトカーに乗せられた。
救急車が来ていて、ブルーシートに包まれたものを乗せていた。
それが何なのか理解したとたんその場に泣き崩れた。
「なぎさぁあああ……！　畜生！　畜生！　畜生畜生畜生！！
あいつら、絶対に許さない。この手で殺すまでは……ッ！」
警察は何もしてくれていない。
彼らは逃げた。
どうしろと――？

事情聴取を受けた後、精神病院に入れられた。
そこで二年は過ごしたと思う。
つらい二年間だった。

出た後も無気力だった。
何をしてもやる気は沸かない。高校にも入れず、ずっとパソコンをいじっている。
あの時のデータはハードディスクが一杯で記録できなかった。
それを知ったとき、またうつ病を発症し、病院に入院した。
僕はなぎさに何にもできないじゃないか。

いつ、どんな時でもなぎさのことを考えている。
そもそもなぎさはなんであんなやつらについて行ってしまったのだろうか。わからない。

最終話　死刑、死刑。

そして今、２０１１年から一年前の２０１０年。
ついにクズらが捕まった。
それを知ったとき、僕は心から喜んだ。本当に嬉しかった。
毎日テレビの前で
「死刑！　死刑！　死刑！　死刑！　イェエエエエエエエエイイイイ！」
と狂ったようにはしゃぎ回っていた。

それから重要参考人として裁判にも出た。
被害者としてではなく、それとして臨んだ。

「――よって彼らを懲役――」
「やめろぉおおおおおお！」

裁判所で思い切り叫んだ。

懲役？　ハッ？　ふざけるのも大概にしろ！
奴らは人を殺したんだぞ？
死刑だ死刑。さっさと殺せ。

「静粛に！」

僕は連れ出された。

泣き叫びながら、なぎさに謝りながら、高等裁判所を後にした。
なんで、こんなに、理不尽なんだ、

少年法って。

僕は今、全力で勉強して議員になろうとしている。
目標は少年法の撤廃。
全部死刑死刑死刑死刑！
――なんてことにはしないが、ある程度の罰を与えなければならない。
クズばかりの日本に成ってしまう前に――

最終話　死刑、死刑。（後書き）

こんにちは、まなつかです。
この物語はフィクションです。

久々に女子高生コンクリート詰め殺人事件の記事を読んで無性に胸くそが悪かったので勉強ほっぽりだして書きました。一時間ほどでしょうか。
なんていうか、残酷です。
残念です。

僕が片山だったらたぶん、おかしくなっているでしょう。
想像しただけでつらいです。
それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0832x/

僕の一夜、小さく終わる。

2011年10月1日03時23分発行